

## 大通公園を望む窓辺から

“おいしゃさん”  
になりたい!

常任理事 すがた 菅田 ただお 忠夫

私は神戸生まれで、源平の合戦で有名な須磨区一ノ谷で育ちました。父は当時の日本の基幹産業であった造船会社に勤務、俗に京の着倒れ、大阪の食い倒れ、神戸の履き倒れ、といわれ、靴は神戸の重要な産業の一つで、母は靴製造業に従事していました。生育環境は、両親どころか親戚一同、その友人知人に至るまで誰一人医療関係者はいなく、全く医療の世界と縁遠い生活でした。

そんな私が、医師を志さそうと思ったきっかけは、小学校4年生の国語の教科書の赤ひげ先生という長文に感銘を受けたためです。山本周五郎の赤ひげ診療譚ではなく、隅田川のほとりで開業している先生のお話で、空襲で大やけどを負った人やけがをした人に手を尽くしている内容に、自分も大きくなったらこんな人になりたいなあと思ったことがそもそものきっかけでした。

その後紆余曲折があったものの、一浪して新設医大に滑り込み、卒業後、奈良県、愛知県を経て北海道に移り住み、現在の小樽市で開院いたしました。

医師になった後、折に触れ国語の教科書のことを思い出し、実際にもう一度読み直したいなあと常日頃思っておりましたが、十年ほど前の中学校のクラス会の際に、神戸市内の公立小学校は皆同じ教科書だったので、参加した友人にこの話をしたところ、皆顔を見合わせて「いや覚えがないなあ。思い違いでは」とさんざんこき下ろされました。その時すでに40年も前の話で、阪神・淡路大震災もあり母校は廃校、家屋もほとんど入れ替わっており、当時の教科書を手に入れることは難しい状況ですが、自らの原点を見つめ直すためにも何とかして探してみたいと思っています。

北海道医師会の皆様、もしもその教科書に覚えがある方がいらっしゃるなら、ぜひともお教えいただければ幸いです。

## 闇と光

常任理事 たかはし 高橋 さとし 聡

もちろん、大してお役にも立っていないとは思いますが、COVID-19流行が始まって以来、道内の多くの医療機関や社会福祉施設で感染対策のお手伝いをしてきました。その中のある病院では、入院患者さんのコロナ検査が立続けに陽性となり、他の施設と同様に保健所の支援を必要としていました。道からの要請で私もお伺いし、“育ちがとても良く品のある”若い院長先生にお出迎えいただきました。その時の第一印象は「院長先生、大丈夫かな?」。クラスター発生という厳しい状況を院長として乗り越えられるのだろうか?と心配な気持ちになりました。

それぞれの病院には特性がありますので「これはできない」という障壁が存在し一筋縄ではいかないわけですが、やはりこのとある病院も障壁には妥協しつつ、しかし、徐々に一丸となって体制を整えていったようです。残念ながら、その後も陽性者が増え、病院職員が疲労困憊していると保健所から伝わるたびに心苦しく鬱屈としていました。

事実として、月単位での時間を要し多大な犠牲を払いつつも、しかし、クラスターは必ず終息します。とある病院のクラスターも終息しました。その後、院長先生から丁寧なお礼状をいただきました。整った字体や無駄のない力強い文面から、記憶の中の院長先生に加えて、「遅しくて頼りになる」院長先生の笑顔（実際には厳しい状況下で拝見しなかった訳ですが）が脳裏に浮かび、ほんの少しだけお礼状の字が滲みました。院内のクラスターは、闇に違いありません。しかし、院長先生や職員の方が一丸となって乗り越えていくことで光が見えてくるのだと思います。これからは、大変な状況に遭遇しても、この院長先生はそれを乗り越えてくれるだろうと、闇だらけのコロナ禍ですが、でも、私にはしっかりと光も見えています。

